

新・日本学誕生

国際日本文化研究センターの25年

猪木武徳

小松和彦

白幡洋三郎

瀧井一博◆編

山内編集事務所 山内直樹
原稿作成 渥美裕子



新・日本学誕生
国際日本文化研究センターの25年

二〇二二年十月三十日 初版発行

編者 猪木武徳・小松和彦・白幡洋三郎・瀧井一博

発行者 山下直久

発行所 株式会社角川学芸出版

〒一〇二一〇〇七一

東京都千代田区富士見二一三三

電話 (〇三)五二一五七八三一 (編集)

<http://www.kadokawagakuji.com/>

発売元 株式会社角川グループパブリッシング

〒一〇二一八一七七

東京都千代田区富士見二一三三

電話 (〇三)三三八一八五二一 (営業)

<http://www.kadokawa.co.jp/>

印刷所 株式会社フクイン

製本所 株式会社フクイン

装丁 渡辺信生

組版 星島正明

© Takenori Inoki, Kazuhiko Komatsu, Youzaburo Sirahata &
Kazuhito Takii 2012. Printed in Japan
ISBN978-4-04-621409-6 C0037

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁本はご面倒でも角川グループ受注センター読者係宛にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

国際日本文化研究センターの25年

新・日本学誕生



猪木武徳
小松和彦
白幡洋三郎
瀧井一博◆編

角川学芸出版

目次

序章 日文研とは 007

「日本文化」を「共同研究」する／なぜ「国際」「センター」か／八〇年代「日本ブーム」／「国際」「学際」「総合」／羅漢たちのアカデミー

第1章 発端の物語 019

1 「世界文化自由都市」と「日本文化研究所」 020

嘘から出たまこと／発端は京都市の「宣言」／桑原流組織術／「異例」までの歩み

2 文部省との折衝 036

梅原の文部省通い／「通常の手順」はとらない／中曽根首相との懇談／「文化の権化」たれ

3 日文研創設の論理 047

「研究」と「協力」の二本柱／国益という名の戦略／梅梅戦争

4 創設への異例の進展 058

政が号令し、官・学が共に走った／紅白梅と桑畑

第2章 創設の物語 067

1 文部省七階の屋根裏部屋 068

屋根裏部屋のころ／室長と次長の十四ヵ月／委員会と専門部会

2 「逆風」に對抗する バツシング 075

反対派が絶対多数／「論争」と「縄文踊り」／私はヤマトイストではない／ANO会の活躍

3 「京都」への誘致問題 093

「京都前提」への批判／さまざまな候補地／設計者、内井昭蔵／八百万の神のすみか／日文研という「別世界」／バツシングとクロバーの思い出

4 「スター」を集める 107

花形教授が集合／定年教授はいらない／若手の採用に尽力

5 仮事務所でのスタート 116

たった八人／コモルームに「面影」

第3章 共同研究の物語 129

1 桑原武夫の知と愛 130

「猛獣使い」／他流試合方式／スターリン型の指導力

2 「研究域」と「研究軸」 139

まったく新しい研究体制／「教授会」「講座制」の廃止／「研究域」「研究軸」

3 共同研究のスタート 149

「共同研究」第一弾／日本人二重構造モデル／「仮説攻撃型」で効果を上げる

4 もう一つの柱、「研究協力」 156

車の両輪／世界の日本研究／国際研究協力の課題

コラム 日文研のデータベース① 外書、外像 165

第4章 日本文化の諸相 175

1 第一世代——「スター」たちの活躍 176

第一世代と第二世代／センターの役割を意識／日本人は個性的である／博覧強記の主宰者たち／「短冊」と「かざり」の世界／「個人」を研究する／壮大なテーマ設定

2 第二世代——「はえぬき」たちの時代 196

ゲリラ的共同研究／「逆欠如」から見た日本／花見は日本にしかない／パンチラから性欲へ／梅原の激励で「武家」「春画」／「環境」と「近代文芸」／小松妖怪学／第三世代へ

コラム 日文研のデータベース② 艷本コレクション 222

第5章 日文研のこれから 231

1 共同研究の研究へ 232

「日文研的」共同研究／「空中戦」の功と罪／懇親会の効用／「成果物」というもの／これからの共同研究

2 国際研究協力の行方 250

日文研はサービス過剰か／研究協力からもらうもの

3 猪木武徳の語る展望——日本研究と学術外交 254

日本研究者のサポートが第一／日本研究の「核」を育てよ／自由な学問、豊かな人材／良質の日本応援団を増やす／国益と学術外交

コラム 日文研のデータベース③ 怪異・妖怪 271

日文研の共同研究一覧 279

刊行に寄せて 小松和彦 290

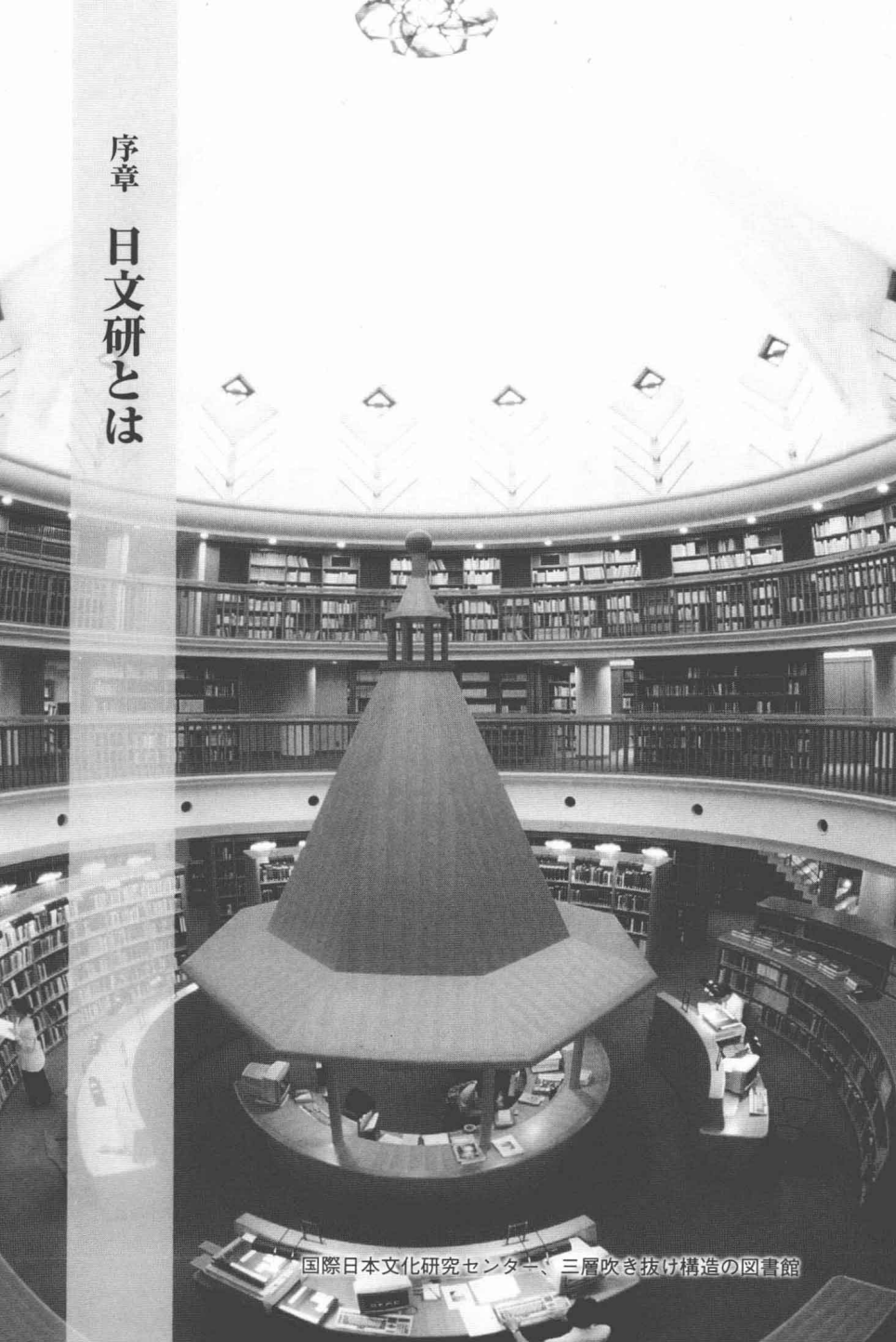
あとがき 白幡洋三郎 292

参考資料 294

インタビュー協力者 295

25年史編集関係者一覧 295

序章
日文研とは



国際日本文化研究センター、三層吹き抜け構造の図書館

「日本文化」を「共同研究」する

「国際日本文化研究センター」が設立されたのは、一九八七年五月二十一日のことである。一般には公開されていない学術研究機関だが、いまでは「日文研」の略称で知られ、広く馴染みの存在となっている。それは初代所長の梅原猛をはじめとする個性的な研究者が多数活躍し、世の人びとの注目を集めてきた結果だろう。

日文研とはどのような存在なのかを一言で表現すると、「日本文化を共同研究する機関」、あるいは、「共同研究方式によって日本研究を行う機関」ということになる。と言うとシンプルだが、日本文化というのはきわめて幅広いものだから、日文研の取り組みも言葉ほどシンプルであるはずがなく、むしろ説明不能なほど多岐にわたっている。

振り返ってみれば、日文研で行われた研究がアカデミズムの流れに一石を投じたり、ブームの火つけ役となったりした例は少なくない。たとえば、梅原猛の縄文学やアイヌ学、またそれと関連する埴原和郎の「日本人二重構造モデル」は、従来いわれてきた日本人の起源に新しい定説を作った。濱口恵俊の日本研究は、八〇年代に国内外で盛んに議論された「日本人論」の中心的役割を果たした。速水融の「歴史人口学」は、学術研究のレベルを超えて国家的な事業へと発展した。硬いテーマばかりではない。早川聞多は「春画」の新解釈で注目を浴び、井上章一は「性欲」に関する一連の取り組みによって日文研の共同研究に、新たな地平を開いた。小松和彦の「妖怪学」は、いまでも根強いブームのさなかにある。

その他、旅、身体感覚、関西論、植民地の問題、将棋、民謡……などなど、日文研の研究者は他の研究機関ではアプローチしえないようなユニークな切り口から、日本とは何か、日本文化とは何か、あるいは日本人とは何なのかを解き明かしてきた。

日文研は、正式には「大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国際日本文化研究センター」といい、頭に長い肩書のようなものがつく。これについて簡単に説明しておこう。

「大学共同利用機関法人」とは、固有の研究目的を持つ独立した機関でありながら、同時に、組織の垣根を超えて関係分野の研究者の便宜に供されているような施設である。古くは、国立大学にしばしば附置研究所というものが置かれていたが、共同利用機関はその附置研を特定の大学から独立させ、すべての大学で共同利用できるような形にしたものと考えていい。たとえば、人文系なら千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館（歴博）や吹田市の国立民族学博物館（民博）、自然科学系なら岡崎市の基礎生物学研究所、三鷹市の国立天文台、立川市の国立極地研究所などが有名だが、日文研もその仲間である。日文研がなぜ共同利用機関の形をとることになったかは、改めて後の章で述べる。

一方、「人間文化研究機構」というのは、大学共同利用機関を束ねる上部組織の一つで、日文研は二〇〇四年に歴博、民博、国文学研究資料館、総合地球環境学研究所の四つの研究機関とともに、その一員となった。現在はここにもう一つ、国立国語研究所が加わって、計六機関となっている（注1）。

なぜ「国際」「センター」か

「国際日本文化研究センター」というのは、よく考えればちょっとおかしい名前である。いまでは意外性も薄れたのか、とくにこれといった異議も出なくなつたが、オープン当時は「意味がわかりにくい」としばしば指摘されたものだ。

たとえば、なぜ「国際」なのか、国立の組織なのだから「国際」ではなく「国立」のほうがよいではないかといわれた。確かに外国人の教員は多数所属しているが、外国人が多くても国際とうたっていない研究組織は世の中にいくらでも存在する。また、「国際」という言葉と「日本文化」という言葉が反発しているようにみえるともいわれた。その通り、この二つは一般的には対立概念として使われることのほうが多いかもしれない。

さらに、なぜ「研究所」ではなく「センター」なのかともいわれた。ただ日本語を英語に変えただけではないのだろうか、その理由が伝わってこない、と。いずれも至極ごもっともだ。しかし、この多少の違和感を伴った名づけにこそ、日文研が設立されたときの意図、あるいは設立にまつわるさまざまな経緯が象徴的に映し出されているのである。

いまその種明かしはしないが、日文研は世に数ある研究組織とはかなり異なる、異色の存在として誕生した。また、それまでこの国にはなかった新しい機能と目的を持った組織として誕生した。そのことと一種風変わりな名づけは深く関係している。

では、日文研のどのような点が既存の研究機関と異なっていたのか。それを語ることは、日文研

がどのような存在意義をもって創設されたかを語ることであり、また今後、日文研がどのような存在意義をもって活動していくかについて語ることでもある。

本年二〇一二年五月、日文研は創立二十五周年を迎えた。二十五年といえば、ちょうど四半世紀だ。そこで、自分たちがこの世に誕生した経緯を振り返り、また、行く末も少々展望してみたい。それが、この本の目的だ。名づけのことに關しても、それを語るプロセスの中で触れるつもりである。

八〇年代「日本ブーム」

「日経平均株価と、日本語の履修者の数は同じ動きを示す」。こんなセリフが、ひところ世界のあちこちで交わされたものだ。

これは半分ジョークだが、半分はあたっている。世界経済と地域研究は、けっこうリンクしている。経済が順調で活気のある国には、世界じゅうが注目する。その国のことを知りたいと思う。いまは中国などがそれだが、八〇年代は日本だった。

七〇年代を境に伸び率二ケタというような経済成長は終わっていたが、代わって半導体などの高付加価値商品が躍進し、世界市場を席巻した。日本企業による外国企業のM&A（合併・買収）が相次ぎ、ニューヨークのビジネスマンの目をむかせたのもこのころだ。ほんの三十年ほど前、敗戦によって完膚なきまでにダメージを受けたはずなのに、なぜかくも短期間で経済大国にのしあがることができたのか。いったい日本人とは何者なのか。その不可思議を解き明かしたいと考える外国

人が増えたのも当然だった。

しかし、日本への関心が高まったからといって、必ずしも日本人や日本文化に対する理解が高まったわけではなかった。なりふりかまわぬエコノミックアニマルといわれたり、本音のわからぬナゾの国だといわれたりした。それだけではない。没個性、集団性、模倣上手、協調性、勤勉、忠誠心、政治音痴……。いまもわれわれに貼られている「いわゆる日本人」のレッテルは、主にこの時代に形成され、定着したものだ。

世界の中での日本研究には、それほど浅からぬ歴史がある。ヨーロッパには近世から日本学（ジャパノロジー）といわれるものが存在し、戦後は占領統治の事情にともない、地域研究としての日本研究（ジャパニーズ・スタディーズ）がアメリカで興隆した。これが、日本が国際貿易の場で目立つ存在になったこの時代に、一種のブームとして華々しく咲いたのである。しかし、学問としての層と厚みが十分に形成されていなかったうえ、経済的成功の一面ばかりに注目したジャーナリストやイックなアブローチが突出したため、面白おかしい日本人像がでかあがってしまった。その意味では、当時の日本ブームは日本研究を発展させたというよりも、むしろ日本に対するステレオタイプを助長させる方向に働いたといえる。

もちろん、その一方で貴重な取り組みもあって、日本の研究者が教えられることも少なくなかった。初代所長の梅原猛は、外国人研究者の着眼によって「江戸学」の潮流が起こり、江戸時代の見直しや再評価の流れが生まれたことや、日本人より早く日本の基層文化としての縄文文化に注目していた外国人研究者がいたことなどをあげ、先入観やイデオロギーによって曇らされている目が、

外からのまなざしによって開くことは多いと主張している。

当時、梅原はよくこう叫んだ。

「いまや、日本文化は日本人にしかわからないなどとうそぶいている時代は終わった」

外国人による日本ブームに逆に火をつけられるような形で、日本のアカデミズムの中に日本研究への情熱が大きく盛り上がっていった。すなわちそれは、日本の文化なりアイデンティティなりを自分自身よく理解して、世界の人びとに向けてきちんとアピールしたいという欲求であり、言い換えれば、ステレオタイプ返上への意地ともいえた。このような背景の中から、日文研の設立計画は生まれたのである。

いまステレオタイプと言ったが、それを言うならステレオタイプは日本人自身の中にもあったのであって、「日本は美しい国だ」とか、「日本人は優秀な民族である」といった根拠のない思い込みによって自分たちの特殊性を信じ込んでいる側面も少なくなかった。日文研設立への情熱はこのような特殊論を超越して、まっとうな学問としての日本研究を確立したいという情熱でもあった。

「国際」「学際」「総合」

こうして浮かび上がった日文研の計画の趣旨を整理すると、大きく次の三つに要約することができる。

一つは、日本とはどのような歴史や伝統や文化を持った国なのかということ、本格的に研究す

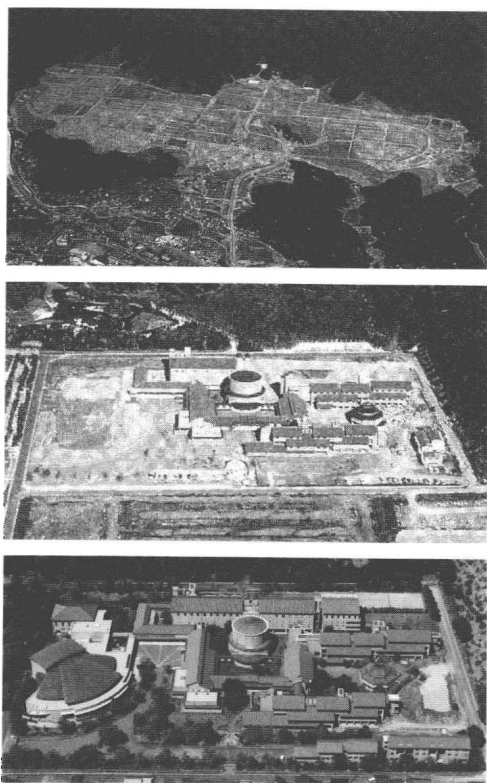
る「場」を作ること。その場は自分たちが研究に取り組むだけでなく、海外の日本研究者たちをバックアップする場ともなることが目指された。二つ目は、従来の日本研究の視野の狭さや偏りを正し、「普遍的な学問」としての日本研究を構築すること。「日本は特別な国であり、日本のことは日本人にしかわからない」といった考え方にとらわれていたら、学術的な発展など望むべくもない。そのためには、トータルな視野が必須であり、蛸壺^{たこぼ}的な研究姿勢——いまの言葉でいうところのオタク化——に陥らないようにせねばならない。そこで志向されたのが三つ目、内外の研究者が集って取り組む「共同研究」という手法だった。

日文研について説明されたパンフレットなどを見ると、今も昔も変わらずキャッチフレーズにうたわれていることがある。それは、「国際」「学際」「総合」の三拍子だ。これこそいま述べたことを端的に言い表している。またこれは、「日本文化を共同研究する」という日文研の活動を、キーワード的に言い換えた場合の表現と言ってもいい。

日文研は、以上のように一九八〇年代の日本の国力の盛り上がりと密接に関係してこの世に誕生したのだが、逆に言えば、この時代に国力が上がったために、日本はようやく自分たちの固有の文化に本格的に取り組む余裕ができたのだともいえる。というのも、戦後の復興期はもちろん、明治の脱亜入欧以来ずっと、日本は西洋の先進国に肩を並べることだけを目指して、ひたすら西洋のほうを向いてきた。つまり西洋の文化を吸収することに忙しくて、みずからを省みる暇がなかったのだ。それが、経済発展によって遅ればせながら可能になった。日文研の設立にはこのような背景があるのである。

羅漢たちのアカデミー

かくして日文研は一九八七年五月にオープンし、それまでの日本には存在しなかったまったく新しい研究機関として注目を浴びることとなった。じつさい日文研の登場によって、それまで一面的にしかとらえられていなかった日本文化はずいぶん広がりを持って、さまざまな局面が見えてきた。



国際日本文化研究センター（京都市西京区大枝桂坂）の施設の変遷。上は1988年、中は1991年、下は2010年に撮影